

# 国民学校期における器楽教育

## ——東京と長野を中心に——

### Instrumental Education in the National School Period: Focusing on the Cases in Tokyo and Nagano Areas

藤井 康之

#### はじめに

大太鼓、小太鼓、木琴を二十、それからミハルスがだいぶ盛んになった頃で、そういったものを一揃いそろえたんです。木琴なんかその頃はおもちゃの木琴しかなかったし、調子が合いません。それで日本楽器に頼んでハ調の木琴を二十本こしらえてもらって揃えたけれども、なかなかこいつが使いえなかったですね。(笑)

これは、我が国の器楽教育の先駆的实践者の一人である、東京市の昭和尋常小学校で音楽教師をしていた上田友亀が、小学校音楽に器楽活動が取り入れられた昭和初期の様子を振り返って語った言葉である(瀬戸ほか 1965、19頁)。この時代から数十年を経た現在、音楽室はリコーダー、鍵盤ハーモニカをはじめ、木琴や鉄琴、太鼓類、さらには日本の伝統楽器や民族楽器などの多様な楽器にあふれ、それらの楽器を用いながら、子どもたちはさまざまな国の音楽を演奏しているのが日常の風景となっている。

音楽教育史研究において、小学校の器楽教育を対象とした研究、とりわけ戦前期を対象とした研究はほとんどなされていない。なぜなら中地が指摘するように、「全国的に器楽教育が普及したのは戦後のことであった。戦後60年間の器楽教育の発展に伴い多様な楽器が普及し、また楽器の開発と並行して器楽教育は発展を遂げた」(中地 2006、75頁)からである。では、戦後期に器楽教育の「普及」と「発展」がなされたのならば、国民学校期に制度的にはじめて取り入れられた器楽教育はどのように意味づけられるのだろうか。そこではどのような器楽活動が行われていたのだろうか。

本論は、学校関係史料(学校日誌、職員日誌、学事報告、備品簿、予算関係書類、文集等)、当該期の文

献史料(著書、音楽教育雑誌)、当時の児童へのアンケートデータおよび音楽教師へのインタビューデータなどを用いながら、制度的に器楽教育が音楽授業に導入され、実践が可能となった国民学校期の器楽活動の実態の一端を、東京と長野の国民学校を対象としながら明らかにすることを主題としている<sup>1)</sup>。

#### 第一節 昭和初期から国民学校期における 器楽教育の状況

明治期から昭和初期にかけて、小学校音楽は「小学校教則大綱」(1907)によって「唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ」(第九条)ることが目的とされ、「唱歌科」という科目名称に表されているように、歌唱活動を中心とした時代であった。上述した上田は、昭和初期の音楽授業において器楽活動は「もちろんありませんでしたよ」と述べ、その後、本論でも取り上げる瀬戸尊や、東京市の和泉尋常小学校および橋本尋常小学校において音楽教師を勤めた山本栄らが徐々に取り組みはじめた(上田 1986、73頁)。黎明期の器楽活動に対しては、上田によれば、「チンドン屋の真似なんか役に立たないというひどい意見もだいぶあった」(瀬戸ほか 1965、19頁)という。

1941(昭和16)年に公布された「国民学校令」によって、小学校音楽はそれまでの「唱歌科」から「芸能科音楽」へと改称されることに伴い、現在の「音楽」教育の形態が整えられた。その目的は「芸能科音楽ハ歌曲ヲ正シク歌唱シ音楽ヲ鑑賞スルノ能ヲ養ヒ国民的情操ヲ醇化スルモノトス」と明記され、従来の歌唱活動に加え、新たに鑑賞活動が制度的に位置づけられた。さらには「器楽ノ指導ヲ為スコトヲ得」という文言が含まれることによって、器楽教育もはじめて制度的に取り入れられることとなった。しかし制度的に取り入れられたとはいえ、順調に器楽活動が行われたわけではなかった。当時の音楽教育雑誌を見ると、さ

まざまな器楽教育実践の問題が取り上げられている。たとえば、「国民学校芸能科音楽に於て『器楽ノ指導ヲ為スヲ得ルコト』と明示されて以来器楽指導に関する研究が真剣に論議され始めた。即ち、器楽の指導をなした方がよいか、或はなさなくてもよいか、又指導するならば如何なる楽器で、如何なる指導法で、如何なる教材でなさるべきかといふ問題が次々と起つて来たことである」（若松 1942、120頁）、「今回の改正の一特色をなす部面であるが、現在何処の学校も困つてゐる問題である。第一楽器がない。更に適当な楽曲がない、或は指導者に自信がない。結局、器楽指導は『一寸手が出せない』と云ふのが大多数の声ではあるまいか」（久木原 1943、56頁）などである。これら二つの言から、器楽教育において「楽器」「教材」「教師」の問題が大きかったことがうかがわれる。

まず「楽器」についてであるが、当時、全国の学校においては器楽教育に必要な楽器はもちろんのこと、ピアノすらも満足になかった状況にあった。川上日本楽器社長の川上嘉市は愛知県を例にあげながら、次のように述べている。

音楽ある所には必ず楽器が無ければならない。随つて楽器の普及は音楽の普及に伴ふものである。上述の如く近来音楽教育が重視されて来たに拘らず、楽器の我国に於ける普及の度は誠に低くして、現在国民学校中ピアノを所有するものは総校数の二〇%にも満たぬ状態である。最近愛知県下の或る国民学校に於ては二十学級の生徒を有し乍らオルガン一台しか備付がなく、生徒の約半数は音楽の授業時間は、楽器なくして授業をして居ると云ふ例もあった。斯る例は他にも枚挙に遑のない有様である。（川上 1941、9頁）

このように全国的にピアノすらも満足にない状況の中で、ましてや器楽教育を行うために必要な楽器不足はかなり深刻だった。上田は、「全然手がつかなかったでしょう。それは楽器もないし、予算的にも、もちろんそんな予算が取れるわけでないですから」（上田 1986、78頁）と、予算的な事情による楽器設備の不足について述懐している。さらに浅草尋常小学校の音楽教師であった長妻完至は、次のように楽器の粗悪さについて述べている。

どこの学校でも、かゝる楽器が備へられるかどうか、ハーモニカの如きは勿論衛星上から見ても、児童各自に持たしめねばなるまいし、木琴の如きは価格の低廉なものになると、殆ど玩具の域を脱せず音律そのものが甚だあやしいものが多く、諸処で実際にやつてゐる容子を見ると殆ど噪音に近い、寧ろ快感ではなく、如何に過渡期とは云ひ乍ら大いに考へさせられる問題と思ふので此の辺は大きな研究問題とならうと思ふ。（長妻 1940、129頁）

次に「教材」については、先述の若松や久木原が述べているように、当該期においては器楽活動のための適当な教材はほとんどなく、本格的な器楽合奏曲集『合奏の本』が文部省から発行されたのは戦後期の1948（昭和23）年になってからであった。山本によれば、「純粹の器楽曲はまだやってないで、だいたい唱歌の教材を中心にしてね、それで曲集を出した。それを持って、そのころ放送へときどき出たことがある。（略）僕はときどき出て、僕の編曲したものや、その本で合奏をやりました」（山本 1986、92頁）と、當時を語っている。

最後に「教師」については、音楽を教えることのできる担任教師の数が少なく、専門的なトレーニングも受けていないため音楽的力量が低かった。たとえば、大阪の天王寺師範学校に勤めていた梅澤信一は、次のような教師の問題に言及している。

国民学校の先生不足と言ふ事は各府県共通の現象であらうと思はれるが、大阪も同様で無資格の先生が多くなり有資格でも初訓の先生がふえた。と言つても、必ずしも本訓の先生と比べて皆が皆教育精神、教育技術に於て劣つて居るとは言へないが（本訓の人にも困つた者が居る）大体に於て指導者の質が低下したものと見てよからう。それにしても他の教科なら何とかやつて行けるかも知れないが、音楽だけは一寸間に合はんと言ふことは先生自身がよく自覺されて居ることと思ふ。だからと言つて初訓や助教の先生が怒つてしまつて「そんなら明日からもう先生はやめた」と言つて出勤されなくなつたんではなほ困る情勢にあるのだから「我国初等国民教育のために勉強して下さい」とお願いするより外ない。（梅澤 1943、54頁）

また、先に引用した長妻も、「実際に相当な楽器を得たとしても指導者が之等を指導し得る実力がなければ何もならぬことであるから、両々相俟つてお互に研究を重ねて、この芸能科音楽の指導者としての力量の修養を怠つてはならぬ訳で、全く之等の有効適切ならしめんには、かゝつて指導者の修養にあると云はねばならぬ」(長妻 1940、129頁)と、器楽教育において教師の音楽的力量が大きな課題となることを指摘している。

では、このような諸問題を抱えつつも、東京と長野においてどのような器楽活動が授業の中で行われたのか、次節以降で描出してみよう。

## 第二節 東京の国民学校

本節では、誠之国民学校(以下、誠之)を中心に、東京女子高等師範学校附属小学校(以下、女高師附小)、東京高等師範学校附属小学校(以下、高師附小)を視野に入れながら、それぞれの学校における器楽活動を見ていくことにしたい。

### 一. 誠之国民学校

#### (一) 瀬戸の器楽教育理念―「子どもの要求」「子どもの生活」とリズム指導の重視―

誠之の器楽活動を描出するときに、当時、同校の音楽教師であった瀬戸尊を抜きにして語ることはできない。すでに述べたように、器楽教育は昭和初期から、上田、山本ら一部の音楽教師たちによって意欲的に行われていたが、瀬戸は彼らより一步先んじて大正末期から精力的に器楽活動を実践していた。瀬戸は、器楽活動をはじめたきっかけを、次のように述懐している。

大正十四年かな、岡崎師範の附属にいたときにはじめてやったんです。それは盲の人がたくさんいて、その盲の人が見にくる音楽会なんです。それはちょっとした簡易楽器だけれどもそのときにやったんですね。演奏のためにやったわけだな、いわゆる音楽会で盲の人が大勢くるから。ぼくが普段やっていたというよりも、どっちかというむしろ演奏会のためにやったんだ。だから、オルガン、太鼓、ハーモニカ、木琴を少しと、それからあとはトライアングルを教生にも入っていただいてやったんで

す。それが最初かな、動機としてはね、ほんとうの意味の器楽教育の動機というのはもっとあとなんですよ。東京に来てから、昭和のはじめですね。(瀬戸ほか 1965、18頁)

その後昭和期に入り、瀬戸は次の赴任校である東京の麻布尋常小学校において、積極的に器楽教育に力を入れることとなる。では、瀬戸の「ほんとうの意味の器楽教育の動機」とはなんだろうか。瀬戸は、「動機」について次のように語っている。

結局子どもの実態、子どもの要求、子どもの生活を見つめてやったのが動機です。いわゆる合唱のできない子がたくさんいるでしょう。そういう子どもたちがむしろ私の対象になったと思いますね。動機というのはそういうことですね。だから、そういう点では派手ではないんです。最初は太鼓がなかったから木の箱を叩いたり、それからトライアングルの代りに仏壇にあるチンチン、ああいうものでやったり、それはすばらしいもので写真も残っています、昭和五年のが。(瀬戸ほか 1965、18頁)

なお、上田も器楽活動を取り入れた「動機」を、瀬戸の「動機」と重ね合わせながら、次のように語っている。

(合奏をはじめたのは)昭和七、八年ですね。それは瀬戸くんの話のように、歌でやってもなかなかうまくやれない子どもが多いし、レコードを聴かせてもほんとうに聴いていない。それで何か子どもの生活に結びついたものを考えなければいかんと考えていたんです…。(瀬戸ほか 1965、19頁)

瀬戸の「子どもの要求」「子どもの生活」に基づいた器楽活動は、リズム指導が重要な位置を占めている。誠之で、女子組の担任を受け持っていた高杉盈子は、瀬戸のリズム指導観について、次のように綴っている。

日頃の瀬戸先生の持論として「必ずリズムをつかむ事、それが出来れば、どんなむずかしい音楽鑑賞も楽しく出来、聞く事が出来る。さあ、これは何拍

子かな、この音楽は二拍子か、四拍子か」と有名なレコードをかけてはご指導くださいました。(高杉 1979、79頁)

瀬戸のリズムを重視する理念は、独自のリズム指導となって音楽活動中で行われている。それが、次項で述べる高師附小の音楽教師だった井上武士に「トンクーは面白いな」(学校音楽研究会編 1938、21頁)と評された「トン、クー、ムネ」の指導である。この指導は、すでに麻布尋常小学校時代に行われていたものであるが、誠之の当時の児童の多くも、このことについて覚えていた。瀬戸によれば、「トン」は四分音符を(右手で左手を叩く)、「クー」は音をのばすときに(空間に円を描く)、「ムネ」は休符を(胸に手を交差させる)、それぞれ表している(学校音楽研究会編 1938、12-14頁)。

当時の児童の一人は、「太太鼓等に当たった時等リズムのとり方を『トン、クウ、ムネ』と教えていただきました。トン(太鼓を打つ)、クウ(間をとるため手をまわす)、ムネ(休止符、胸に手をおく)」(誠之・14・女)<sup>2)</sup>と、アンケートにそのときの記憶を記している。瀬戸は独自のリズム指導によって、リズム、拍子感を子どもたちに意識的に感得させ、演奏させることをねらったのである。「トン、クー、ムネ」の指導は、戦前期だけではなく戦後期においても引き続き実践されている。

さらに「トン、クー、ムネ」のリズム指導だけではなく、瀬戸は音楽授業とは別に、個別のリズム指導も行っていた。このときの共通の思い出を、当時の児童や同僚の教師は次のように述懐している。

三年生頃のことです。瀬戸先生は、リズム音楽を取り入れようとなさり、体で覚えさせようと考えたのでしょうか。女子は三クラスありましたが、各クラスから五人位えらばれて、放課後、屋上にゆき、ある人はタンバリンをたたき、ある人はチョークで書かれた○の中を、リズムに合わせて、トン、パー、トン、パー、トン、トン、パー、などと口ずさみ乍ら、跳んだ記憶があります。これはテストケースでやったのでしょうか。授業でやったわけではありませんでした。(誠之・14・女)

瀬戸先生はリズムをつかむことを熱心に教えて下さり、体を通して拍子をとること、例えば屋上に白墨で○を書き、トントンパーとか、トンパートンパーとスキップをしました。(誠之・14・女)

トントンパートンパートンパーといった具合に屋上に白墨で○を書き、タンバリンをたたきつゝ歩行したり、スキップしたりしたものでした。(高杉 1979、79頁)

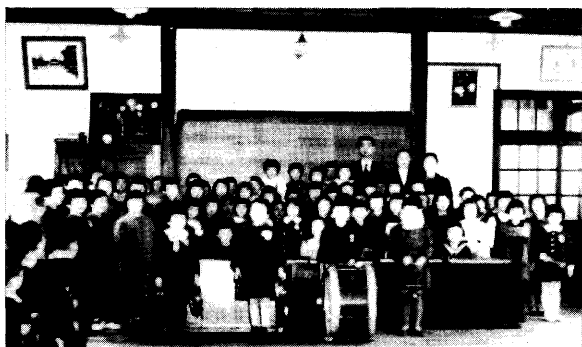
## (二) 器楽活動の実際

瀬戸が1940(昭和15)年9月に誠之に着任し、国民学校期の音楽授業が大きく変わったことを、児童の一人は「瀬戸先生になってからすっかりかわり、和音、器楽、合唱等々いろいろなことが行われ、とても楽しかったのを覚えています」(誠之・12・女)と、鮮明に記憶している。では、どのような器楽活動が行われたのだろうか。

まず、誠之の楽器状況について見てみたい。「備品原簿」によれば、瀬戸が着任した約半年後の1941(昭和16)年2月から3月に、「太鼓(吊革付)一、トライアングル、ミハルス二打、シムバル一対」と記入されていることから、わずかではあるが誠之で楽器が購入されていたことがわかる。これは瀬戸が「国民学校令」に対応するための準備と、前任校時代から力を入れていた器楽活動を、同校でも引き続き行おうとしていたためと思われる。

当時の児童へのアンケートでは、ミハルスと、「備品原簿」には記入されていない木琴を用いた器楽活動の記憶が多い。ミハルスに関しては、「カスタネットは当時ミハルスといひ、各自が買われました」(誠之・13・男)、「春の小川をミハルスを用いながら歌いました」(誠之・14・女)などが、一方木琴については、「『みなと』『村のかじ屋』などを木琴(両手)で上手にできました」(誠之・14・女)などの証言がある。

次の写真は1941(昭和16)年11月に催された本郷区連合音楽会の日に、音楽室で撮影されたものである。写真を見ると、トライアングル、太鼓類、シンバル、タンバリン、木琴、オルガンの楽器が確認でき、児童たちはこれらの楽器を中心に器楽活動を行っていたことがうかがわれる。ある児童は、音楽室に備えられ



ていた楽器の情景について、「ピアノ（グランド）、太鼓、木琴、棚にはトライアングル、タンバリンなど」（誠之・14・女）があったことを覚えていた。瀬戸に指導を受けた児童たちは、これらの楽器を用いながらさまざまな場で、先述した山本と同様に、「唱歌」を中心とした音楽を演奏したことを明確に記憶している。

たとえば、『虫の声』については、「私の組が研究会の発表会でしょいか、参観者の前で演じました。瀬戸先生は児童の能力にふさわしい器楽を割あててみんなが楽しめるように心をくだいて下さったと思います。蟲の声をトライアングルや鈴、カスタネットを使ったのを今思い出しました」（誠之・14・女）という思い出が、アンケートに綴られている。

また、『カッコウワルツ』の記憶も多い。「三年生頃、音楽の研究発表会だったでしょうか。級中で太鼓、タンバリン、カスタネット、木琴に分かれ担任の先生の指揮で“カッコウワルツ”を演奏しました。カスタネットを持ってリズムに合わせ踊った事は忘れられない思い出です」（誠之・14・女）と、今なお鮮明に研究発表会風景を記憶している児童もいた。この研究発表会については、女子の組の担任をしていた吉村郁子も、次のように回想している。

レコードにあわせて、カスタネット、トライアングル、タンバリンなど使い、カッコウワルツを演奏したのですが、音楽はあまり得意でない私がタクトを振るというわけで、随分緊張したものです。○さんに太鼓をお願いして、そのリズムにあわせて一生懸命練習したものです。そのリズムにあわせて手を振り足を動かし踊ったのはどなた達だったかしら。

（略）皆様が下校された後も私はレコードをかけて、くりかえしくりかえし、そのリズムを耳底深く

きざみこみました。」（吉村 1979、116頁）

研究発表会を記憶していた児童は、「後で知りましたが、瀬戸先生の陰でのご指導があったようです」とアンケートに書いていることから、吉村のように音楽が得意ではない同僚の教師たちの手助けをしていたことがうかがわれる。さらに『カッコウワルツ』については、先述した同僚の高杉が次のような回想を残している。

よく音楽の時間の参観者も沢山ございました。その発表会に、この二組がえらばれて「カッコウワルツ」を練習する事になりました。音楽の時間のみならず、放課後も残り、今日は木琴、今日はハーモニカ、或は太太鼓、小太鼓といった具合に私も一緒に練習いたしました。（略）音楽発表会の当日は誠之の古めかしい講堂で二組全員が壇上にのぼり、カッコウワルツの大演奏を致しました。誰か太太鼓があやしくなった時は、そっと瀬戸先生が後から応援して下さって無事に終了いたしました。今でもカッコウワルツがきこえてくる時は、あの当時を思い越し、「カッコウワルツ」は私の懐かしのメロデーとなっています。（高杉 1979、79頁）

この他に児童たちの印象に残っている合奏曲として、『花火』『たなばた』『港』などがある。『花火』と『たなばた』では、「追分小学校で『花火』どんとなった花火きれいだな♪『たなばた』笹の葉さらさら軒端に揺れる〜♪を演奏したことがあります（トライアングル担当）」（誠之・15・女）という思い出が、『港』では、「各自木琴を持って登校した。“それもよは晴れて”が最初の木琴を習った曲だった様な気がする」（誠之・12・女）という思い出が、それぞれ記憶されている。

なお、瀬戸が器楽指導の際に用いた楽譜については、当時の児童の証言からはわからなかった。おそらく山本や上田と同じように、瀬戸自身で編曲した楽譜によって指導したものと考えられる。瀬戸が当該期に編曲した楽譜がないため、当時の器楽活動をうかがい知る参考として、上田が編曲した『港』と『村の鍛冶屋』の楽譜を章末に付しておくことにしたい（上田 1943、145-146、152-153頁）。

瀬戸の器楽活動は、「研究会の発表会ででしょうか、参観者の前で演じました」「よく音楽の時間の参観者も沢山ございました」「音楽発表会」「追分小学校で（中略）演奏したことがあります」と、これまでの児童や教師の記憶にあるように、授業内にとどまるものではなかった。「学校日誌」を見てみると、昭和16年度に「深川区より合同参観 瀬戸訓導ノ講話ヲ聴キテ帰ル」（6月）、「父兄会 音楽教育の実演」（6月）、昭和17年度に「音楽研究授業」（6月）、昭和18年度に「音楽指導講習」（6月）、昭和19年度に「音楽研究授業」（6月）などの記述が見られることから、父兄の前や学校内外の音楽会、研究授業などで、瀬戸が積極的に器楽指導をデモンストレーションしていたことがうかがえる。ある児童は、「音楽室の後ろの方に参観者用の椅子が置かれ、他校から参観に見えている方が度々ありました」（誠之・14・女）ということを知っており、誠之では瀬戸の授業を見るために参観者が来ても対応できるような準備が整えられていたようである。

## 二. 東京女子高等師範学校附属小学校

女高師附小では、小菅和江が音楽授業を担当していた。小菅は音楽教育雑誌上で、器楽教育の意義について、「聴覚訓練」との有機的な関連と「団体的精神」の育成による「国民精神」形成の二点を、次のように強調している。

聴覚訓練の上からも、簡易楽器が、音の高低・強弱・音色・律動・和音等に対する鋭敏な聴覚を養ふといふ事を重視されるべきだと思ひます。（小菅 1940、87頁）

各自が心を合せて之を演奏し、音を和してゆかうとする努力がなされます。そこに団体的訓練がなされ、皆で一つの美しいものを目指して進むといふ善なる気持ちと一体になる時、団体的精神即ち協力して一つのものを基づいてゆかうと言ふ心が養はれるのです。之こそ国民精神の芽生えとなる尊い気持ちの統一だと思ひます。（小菅 1940、88頁）

この二つの意義の下、小菅は「五六年の男子にハーモニカバンドを編成させて、唱歌・時局的歌曲・マー

チの合奏指導」（小菅 1940、88頁）、「『エンソク』の歌曲に合せてミハルスを用ひ、二拍子を鮮明に拍たせつゝ、行進させ、音の律動・強弱に対する敏感性を全身全霊を働かして修練する」（小菅 1941、頁数なし）器楽活動を行っていたことを報告している。しかし実際には、ほかの音楽活動に比べて、器楽活動を熱心に繰り広げていたわけではなかったことを、小菅はインタビューの際に語っていた（小菅 2000）。事実、後任の音楽教師であった福田静子によれば、小菅が「和音がわかるから」と思い、赴任した際に購入した木琴が、福田着任時にも未使用のまま戸棚に収められており、大がかりな合奏に発展したのは戦後になってからとのことであったという（福田 1998）。

## 三. 東京高等師範学校附属小学校

高師附小では、小林つやえ、井上武士の音楽教師がいた。本多ほかの研究（本多ほか 2007、48頁）によれば、小林は低学年を担当しており、身体を使ったリズムの体験や遊戯的な指導を重視していた小林は、リズム指導の一方法として、ミハルスを使用した活動を行っていた。一方、主に高学年を担当していた井上は、「（国民学校令には）『器楽』ノ指導ヲ為スコトヲ得」と示されてあります。芸能科音楽実践の一項目として器楽指導をも実施することが許されて居るのであります。芸能科音楽実践の目標は、以上の如く『歌唱指導』『鑑賞指導』及び『器楽指導』と判断することが出来ます」（井上 1943a、7頁）と器楽活動の重要性については認めていたが、「器楽指導は出来ればやるといふ程度に考へて居ります」（井上 1943b、7-8頁）と述べているように、器楽活動に対しては消極的であった。

## 第三節 長野の国民学校

本節では、長野の上田地域、飯田地域、高遠地域にある各国民学校の器楽活動について、述べていくことにしたい。

### 一. 上田地域の国民学校

上田地域で対象とする学校は、塩尻、神科、上田南、上田中央、上田北、上田東、豊殿の各国民学校である。

塩尻の「学校日誌」を見ると、国民学校が発足した

1941（昭和16）年4月に、「国民学校として考えねばならぬ問題」として「音楽の教授の研究」が記述されていることから、従来の歌唱活動だけではなく、国民学校の発足にあわせて、鑑賞活動や器楽活動も含めた「音楽の教授の研究」が意識されていたようである。

器楽活動に関する児童の記憶は、「オルガン、ハーモニカ、ラッパ」（塩尻・13・女）、「ピアノ一台、オルガン一台、吹奏楽器。ホルネットを練習した」（塩尻・14・男）、「太鼓、ピアノ、レコード、蓄音器、木琴、ラッパ（進軍ラッパを先輩が吹いたのを覚えている）」（塩尻・16・男）、「ピアノ、オルガン、けん楽器、きんかん楽器等一式があった」（塩尻・16・男）など、吹奏楽器を中心とした記憶が多く見られた。これらの吹奏楽器を中心とした記憶は、1941（昭和16）年10月に「ブラスバンド楽器着荷（在京本校出身者寄贈）」「ブラスバンド 音楽室におく 手入する」、1942（昭和17）年9月に「校庭運動会 期日 十月十日 ブラスバンド ラッパ 独唱等を取込む事」、1943（昭和18）年11月3日から5日にかけて、「来校者 高橋先生 ブラスバンド児童」など、「学校日誌」に記述されているように、塩尻がブラスバンド活動に力を入れていたことと関係しているであろう。

その一方、「楽器は有りましたがおぼえていません。楽器を使った授業はないように思います」（塩尻・14・男）、「楽器は、ピアノ、オルガン、その他は記憶がない」（塩尻・16・男）など、器楽活動についてはっきりと覚えていない児童がいた。また、塩尻では男女児童がハーモニカについて、「ハーモニカはお米を持っていき町の楽器屋で買いました」（塩尻・13・女）、「ハーモニカは自分が買ったのを持っていた様な気がする」（塩尻・16・男）と記憶していた。しかし、女子児童によれば、「吹けるまでの授業はとれませんでした」とのことであった。これらの証言から、塩尻では、授業において器楽活動をほとんど行っていなかったと思われる。

神科の「学校日誌」には、1942（昭和17）年11月に「来校者 箱山調律師 楽器修理」との記述が見られるが、どの「楽器修理」なのか不明である。しかし、神科の青年学校では、1942（昭和17）年5月19日から20日にかけて、「喇叭鼓隊 午後八時ヨリ練習」「喇叭鼓隊 練習」、国民学校では同年8月に、「県主催吹奏楽講習 二斉藤訓導出席ノタメ長野へ出発 十二日

迄」、1943（昭和18）年4月に「ブラスバンド十人編成寄附方申込」などの記述が「学校日誌」にあることから、塩尻と同様に「喇叭鼓隊」「吹奏楽」が盛んであった神科では、これらの活動に使用する「楽器修理」をした可能性が高い。

神科で学んだ児童たちは、楽器の設備について、「ドラム、タイコ」（神科・12・男）、「ピアノ、オルガン、木琴、アコーディオン」（神科・13・男）、「オルガン、木琴」（神科・16・男）などを記憶している。木琴があったことを覚えている児童が二人いるものの、木琴を使用した具体的な活動について記憶している児童はいなかった。

また、「個々にハーモニカ、カスタネット」（神科・15・男）を持っていたことを記憶している児童があり、カスタネットを使用した活動として、「先生のピアノに合せてリズム合せ（カスタネット）」（神科・12・男）との証言がある。「学校日誌」によれば、神科でピアノが購入されたのは1940（昭和15）年9月、ピアノ披露式が12月に行われているので、もし「ピアノに合せてリズム合せ」をしたのであれば、おそらく昭和16年以降であろう。神科の器楽授業で注目したいのは、上述の「個々にハーモニカ、カスタネット」を持っていたと記憶している児童の証言である。この児童によれば、「太鼓、小太鼓、タンバリン、ラッパ、トランペットは特殊チームが習い行進の先頭に立った」ことを覚えており、ここから太鼓類や吹奏楽器は、授業の中ではなく、一部の児童によって学校行事等で使用された可能性が高いと思われる。

上田南の「昭和十五～十八年度買物帳」を見ると、昭和15年度に、「金四円二〇銭 ハーモニカ 一、金四円十八銭 ハーモニカ 一、金貳円二十三銭 木琴 一、金貳円五十七銭 木琴 一 上田市海野町 琴光堂」、また昭和18年度の「寄附台帳」には、「木琴五〇台、海野町 坂井静枝 二〇〇円、同河合様 一〇〇円、常田町壮年団 五〇円」との記述があり、昭和15年度に地元の楽器店から購入したハーモニカ二つと木琴2台、昭和18年度には地元の人たちの寄附金によって木琴50台が購入されている。しかし、上田南で学んだ児童は、「ピアノだけの音楽室があった様に思います」（上田南・16・女）と記憶しており、ハーモニカや大量の木琴を使用した活動については不明である。しかし、昭和22年度の「購入仕訳簿」に

は、「木琴バチ音楽用 三二本、六四円」との購入記録があることから、おそらく戦後になって、木琴を使った器楽活動が盛んに行われるようになったと推察される。

上田中央の「予算下調」には、昭和19年度に、「ミハルス 数量五〇、単価七五銭、金額三七円」との記述が見られるが、どのようにミハルスが使われたのかは不明である。戦後になり、昭和23年度の「物品購入回議簿」に「木琴 半音附」「半音附木琴 木製 音楽用 一六、ミハルス 三〇、タンボリン 皮製 一、トライアングル 金属製 二、タンボリン 一、シンバル 一」の購入記録がある。1949（昭和24）年3月に行われた学芸会の反省を綴った記録において、「学芸会の反省 歌と器楽、夜汽車、村のかじや、四ノ一、村のかじや、テンポ早し 木琴とオルガン合奏 三ノ二、オルガンの基礎的練習、木琴のトレモロ指導」との木琴に関する記述が見られることから、上田中央では、上田南と同じように、戦後、さらに楽器の充実がなされることによって、木琴をはじめ、打楽器を含めた本格的な器楽活動が行われるようになったと考えられる。

上田北で学んだ児童は、「ピアノの他には楽器はなかった又生徒は楽器に触れることは許されなかったように記憶しています」（上田北・12・男）、「楽器はピアノのみ」（上田北・14・男）と記憶しており、器楽活動に関する記憶は見られなかった。

上田東で学んだ児童も、「オルガン、ピアノ、木琴」（上田東・16・女）があったことを記憶しているが、一方で「楽器はピアノ、眺めるだけで触れることもできませんでした」（上田東・14・男）との記憶も見られ、おそらく本格的な器楽活動は行われていなかったと思われる。

同様に、豊殿においても児童は、「音楽室はあり、ピアノ一台、オルガン一台があった。ほとんどの音楽授業はオルガンであった」（豊殿・14・男）、「先生がピアノで授業。ピアノ、オルガンには手もふれられなかった」（豊殿・16・男）と、ピアノとオルガンに関する記憶が鮮明で、器楽活動について覚えている児童はいなかった。

## 二. 飯田地域の国民学校

飯田地域の器楽活動については、本多がすでに論じ

ているので（本多ほか 2010）、本多ほかの研究を参照しながら、座光寺と上郷の器楽活動について述べていくことにしたい。

座光寺の昭和15年度の「学事報告」には、「国民生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ体得セシメ情操ヲ醇化セシメ健全ナル心身ノ育成ニカム 一、教授の徹底 実践化 特ニ芸能科 情操醇化 音楽 音感教育 器楽練習 音楽会 七月二十一日 二月二十七日」との記述が見られ、翌年に実施される国民学校に備えた音楽教育の一つとして「器楽練習」が意識されている。翌年4月の「学校日誌」には「芸能科 音楽 音楽会 毎学期一回 式歌練習 十分徹底サセル、職員 音楽研究ヲ為ス 木琴一〇 笛一〇 購入 ハーモニカ（個人）活用」と記されており、芸能科音楽に対応するために、ハーモニカは個人のものを活用するものの、木琴10台、笛10本が新たに購入されている。座光寺の児童は木琴について、「音楽室ありました。木琴、蓄音機、オルガン」（座光寺・13・女）、「ピアノとオルガン、木琴（小）がありました。木琴は数が少ないので順に替って練習した」（座光寺・15・女）との記憶があり、購入された木琴を使って、学期ごとに開かれる音楽会で披露する楽器の練習が授業の中で行われていたことが推察できる。また、昭和22年度の「学事報告」には、「木琴 東京におられる座光寺出身の方から寄附」との記述があり、戦後も引き続き、木琴による器楽活動が行われていたことがわかる。

上郷の昭和16年度の「学校日誌」には、「六. 器楽につき、ハーモニカ 呼吸のし方をもっと アコーディオン 弾き方の指導 木琴 <sup>不明</sup>□□につき」「九. 器楽をやると音楽に子供が熱心になる」と、3月に行われた音楽会の反省記録が記されている。ここから、ハーモニカ、アコーディオン、木琴の演奏を、子どもたちが「熱心」にしていたことがうかがえる。翌年の「学校日誌」にも、11月に行われた音楽会の記述があり、その中で「音楽会反省議事 九. 器楽の吹奏もよろしかつた」とある。

上郷の児童は楽器の中でも木琴について、「木琴は音楽会に使用する場合等は使わしてもらい、両手が上手に使えず苦勞したのをおぼえています」（上郷・12・女）、「備品 グランドピアノ、オルガン、木琴。ピアノは先生だけ。木琴は全員。オルガンは時々私達にも使用出来た」（上郷・12・不明）、「楽器はピアノ



一、オルガン一、木琴三。ピアノ、オルガンには生徒はふれることが出来ませんでした。木琴は交代でさわる程度でした」(上郷・16・女)と記憶している。上郷でも、座光寺と同じように、音楽会での演奏に向けて、授業の中で木琴の練習をしていたようである。

### 三. 高遠地域の国民学校

高遠地域には高遠国民学校があった。高遠における器楽活動を述べるにあたっては、国府の研究に基づきながら述べることにする(国府 2004、12-13頁)。

高遠には、ピアノとオルガンがあったが、「昭和一二年度 看護日誌」の4月7日の記録によれば、「音楽室に入り、ピアノ、オルガン其の他に手をつけぬ様注意す」とあり、上田北、上田東、豊殿と同様に、普段子どもたちはピアノ、オルガンに手を触れることはできなかったようである。

一方それ以外の楽器は、昭和16年度にカスタネット一つ、昭和17年度に木琴5つが購入されている。アンケートでは、カスタネットや木琴が音楽室にあったことを記憶している児童たちもいるが、実際に器楽活動を行った記憶はなかった。戦後期になり、1948(昭和23)年5月26日の「学校日誌」には、「木琴注文書発送一九台」という記録が見られる。9月12日には「鈴木出張 木琴講習」、12月19日には「行事 木琴講習会 講師 鈴木」とあり、一人の教師が木琴の講習を受け、そこで学んだことをほかの教師たちに伝えていたことがわかる。これらのことから、高遠における器楽活動は戦後期になってはじめて本格化したといえよう。

### おわりに

本論は、学校関係史料、音楽教育雑誌、当時の児童へのアンケートデータ、当時の音楽教師へのインタビューデータなどを用いながら、東京と長野の国民学校における器楽活動の実態の一端を明らかにしてきた。

器楽活動は、国民学校期になってはじめて制度的に取り入れられたが、東京と長野での器楽活動の取り組みを見てみると、瀬戸尊が指導していた誠之での器楽活動以外は、盛んに器楽実践が行われていたとはいえない状況にあった。全国における小学校の指導的役割を果たしてきた女高師附小や高師附小においては、楽

器の設備がある程度用意され、器楽活動が行われていたものの、小菅、小林、井上を含めた音楽教師たちは、多様な楽器を用いた豊かな器楽実践を行うまでにはいたっていなかった。

一方長野に目を向けてみると、上田地域の塩尻、神科ではブラスバンドや喇叭鼓隊が編成されていたことから、授業での器楽活動よりも、これらの活動が器楽活動の中心となり、場合によっては神科のように、一部の児童による「特殊チーム」だけが授業外での器楽活動に積極的にかわっていたと推察される。

また、上田南や上田中央のように、戦後になって本格的な器楽活動が行われたと思われる学校、上田北、上田東、豊殿のように、器楽活動がほとんど行われていなかったと考えられる学校などがあり、実態は様ではない。

飯田地域の座光寺、上郷でも、ブラスバンド活動が盛んであったが(本多ほか 2010、133頁)、塩尻、神科とは異なり、音楽会で披露するための木琴の器楽活動が行われていた。木琴は、このほかにも本論で取り上げた上田南、上田中央、高遠の学校関係史料、塩尻、神科、上田東の児童へのアンケートにも見られる楽器で、戦前戦後期にかけて、子どもたちの器楽経験の充実に寄与した楽器といえる。しかし、第一節でも長妻を引用しながら触れたが、当時の木琴は現在のそれとは異なり、品質が粗悪だったために扱いに困ったようである。当時の木琴について回想した興味深い座談会がある(瀬戸ほか 1965、19-20頁)。座談会のメンバーは、本論で取り上げた瀬戸、上田、山本に加え、戦後期に「日本器楽教育連盟代表」を務めた石川誠一である。

石川：当時一番困ったのは、木琴やハーモニカの調整の問題でしたね。木琴なんかもガチャモクで、狂ってくるとどうしようもなかった。

山本：あの頃の木琴はc i s(嬰ハ)になってましたね。

上田：c i sになったのは、Cにこしらえてもらったのが、たいがいc i sになったんです。

瀬戸：いつか日比谷の公会堂へ行って木琴をやったんです。いざやってみるとc i sなんだよ。熱気でかわいてしまったんです。これはよかったね。

本論で取り上げたそれぞれの学校でどのような品質の木琴を使用していたのかわからないが、この時期の木琴を使った器楽活動がどのようなものだったのかを知るうえで重要な発言といえよう。

最後に、本論を通して今後の器楽教育研究に対する示唆を二点述べてみたい。一点目は個々の特殊性を重視した研究の蓄積についてである。本論でこれまで見てきたように、東京や長野というそれぞれの府（都）県を見ても、国民学校期に取り入れられた器楽活動はすべての学校が足並みを揃えて実践を展開したわけではなかった。すなわち、各地域、各学校において器楽活動の取り組みには大きな差異が見られた。このことから、第1節でも触れたように、各学校における楽器設備の状況と教師の音楽的力量に加え、長野で見られたブラスバンドや喇叭鼓隊のように、その地域における学校文化や器楽文化の特性をも同時に考慮しつつ、個々の学校内外の器楽活動の実態を豊かに蓄積することによって、器楽教育、ひいては子どもたちの器楽経験の全体像を明らかにしていく必要があるだろう。

二点目は戦前戦後期の連続性についてである。上田は、国民学校期の器楽教育について、次のように述べている。

だんだん方々で（中略）研究する人が出て来まして、昭和十六年国民学校になった頃には、大体現在の形の母体が出来ておりました。（大村ほか1957、3頁）

新音楽教育に於ける主要課題は、器楽指導ではあるまいか。といってもこの課題は、この度新しく取り上げられたものではない。国民学校でも既に芸能科音楽の中に採り入れられていたものであり、それより数年前から心ある人達によって実際的な研究が行われていて素地が作られていた。（上田1947、10頁）

本論の冒頭で引用した中地が指摘するように、楽器産業の興隆と歩調をあわせて、我が国の器楽教育の「普及」と「発展」がなされたのは戦後期になってからである。しかし、上田が述懐するように、戦後期における器楽教育の「母体」と「素地」が、昭和初期から国民学校期にかけて確実につくられていったことは

重要である。事実、本論が対象とした学校の一部ではあるが、東京の誠之や女高師附小、長野の上田南、上田中央、座光寺、上郷のように、国民学校期における器楽活動の取り組みが、戦後期につながる大切な「母体」と「素地」となっていた場合もある。この点において、国民学校期における器楽教育の実践は、現在の器楽教育と地続きにあるとともに、国民学校期はそれまでの器楽教育のあり方を跡づけ、これからの器楽教育のあり方を展望していくための看過できない画期として、きわめて重要な意味を持つのである。

### 【注】

1) 本論において、中心的資料として使用している学校関係史料（学校日誌、職員日誌、学事報告、備品簿、予算関係書類、文集等）、当該期の文献史料（著書、音楽教育雑誌）、当時の児童へのアンケートデータおよび音楽教師へのインタビューデータ、写真等は、下記の成果に基づいている。

・本多佐保美研究代表者「音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究—国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて—」（平成13年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）、課題番号：13480054）。

・本多佐保美研究代表者「昭和10年代の音楽教育実践史に関する総合的研究」（平成17年度～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2）、課題番号：17530638）。

・本多佐保美研究代表者「昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究」（平成20年度～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2）、課題番号：20530803）。

また、文献史料の一部に関しては、下記にも依っている。

・藤井康之研究代表者「大正期から国民学校期における小学校『音楽』形成過程の歴史的研究」（平成23年度～25年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号：23531193）。

2) アンケートデータおよびインタビューデータにおける「（誠之・14・女）」の表記は、「誠之国民学校・昭和14年度入学・女子児童」の略記である。以下も同様である。

## 【文献】

- ・井上武士 (1943 a) 「音楽教育者への要望」『音楽教育』第5巻第1号。
- ・井上武士 (1943 b) 『国民学校芸能科音楽問答』藤井書店。
- ・上田友亀 (1943) 『国民学校 器楽指導の研究』共益商社書店。
- ・上田友亀 (1947) 「新音楽教育を動かす器楽指導」『教育音楽』8月号。
- ・上田友亀 (1986) 「上田友亀一初期の器楽教育実践一」木村信之編『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社。
- ・梅澤信一 (1943) 「国民学校音楽教室を巡りて」『音楽教育』第5巻第3号。
- ・大村兼次ほか (1957) 「座談会 器楽教育における当面の諸問題について一楽器業界の人々をかこんで一」『器楽教育』第4号。
- ・学校音楽研究会編 (1938) 「学校音楽研究会推薦 第一回唱歌研究授業」『学校音楽』11月号。
- ・川上嘉市 (1941) 「日本に於ける楽器政策」音楽教育研究会編『音楽教育研究』第3巻第10号。
- ・久木原定助 (1943) 「国民学校芸能科音楽巡り」『音楽教育』第5巻第3号。
- ・国府華子 (2004) 「第一章 音楽室の光景：設備・楽器・備品から見る音楽授業 第一節 高遠国民学校」『音楽教育史における制度。教師・学習者の関係性の探究一国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて一』（平成13年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書）。
- ・小菅和江 (1940) 「芸能科音楽における器楽指導」東京女子高等師範学校附属小学校内児童教育研究会編『児童教育』第34巻第8号。
- ・小菅和江 (1941) 「第三部初等科第一学年芸能科音楽授業案」東京女子高等師範学校附属小学校内児童教育研究会編『第七回教育実際指導講習会要項』。
- ・小菅和江 (2000)、小菅先生のご自宅にてインタビュー。参加者は西島央、藤井康之、本多佐保美。
- ・瀬戸尊、山本栄、石川誠一、上田友亀 (1965) 「座談会 先駆者が語る器楽教育の変遷」『器楽教育』第8巻第2号。
- ・高杉盈子 (1979) 「誠之小学校の思い出」誠之小学校昭和20年卒業同期生会編『再現卒業式記念論文集 誠之国民学校の思い出』。
- ・中地雅之 (2006) 「器楽教育の展開」音楽教育史学会編『戦後音楽教育六十年』開成出版。
- ・長妻完至 (1940) 「芸能科指導について」『国民学校』第1巻第7号。
- ・福田静子 (1998)、渋谷駅の喫茶店にてインタビュー。参加者は上田のり子（元・お茶の水女子大学附属小学校音楽教諭）、国府華子、佐野靖、西島央、藤井康之。
- ・本多佐保美、藤井康之、佐藤香織 (2007) 「昭和10年代の東京高等師範学校附属小学校・国民学校の音楽授業構成一井上武士・小林つやえの授業実践から見る一」『千葉大学教育学部研究紀要』第55巻。
- ・本多佐保美、西島央、永山香織、大沼覚子、藤井康之 (2010) 「昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究一長野県飯田市の事例をとおして見る地域と学校一」『千葉大学教育学部研究紀要』第58巻。
- ・山本栄 (1986) 「山本栄一器楽教育の実践と普及活動一」木村信之編『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社。
- ・吉村郁子 (1979) 「『女三組と私』」誠之小学校昭和20年卒業同期生会編『再現卒業式記念論文集 誠之国民学校の思い出』。
- ・若松盛治 (1942) 「国民学校に於ける簡易楽器の指導に就て」『音楽教育』第4巻第3号。

# 港

木 琴

ミハルス

タンブーリン

トライアングル

大太鼓

ピアノ

# 村の鍛冶屋

木 琴

タンブーリン  $\frac{2}{4}$

トライアングル  $\frac{2}{4}$

ピアノ *mf*